

NPO法人 黒島観光協会

景観保存とガイド 住民主体の組織で来島者を 受け入れ

NPO法人黒島観光協会 理事長 山内一成

ウエルカムハウスを拠点に活動する黒島観光協会

佐世保市相浦港あいのつちからフェリーで一日三便、約五〇分。

黒島は二〇八島からなる九十九島で最大の島です。昔から水が豊富なことから「水島」とも呼ばれ、海賊が水を求めて黒島に上陸したとも言われています。今でも黒島港の近くに地下水が湧き出ており、本村地区の簡易水道の水源になっています。

黒島は禁教令下で西彼杵半島せいのまの外海地方そとめや五島などから潜伏キリシタンが移住してきた歴史を持ち、現在住民の約八割がカトリック教徒で、私もその一人です。島には寺院もあり、カトリックと仏教が混在した独特の文化を育みながら、開拓の歴史を刻んできました。「黒島の集落」は平成三〇年七月に世界文化遺産に登録された「長崎と天草地

方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産の一つで、佐世保市で唯一の世界文化遺産の島となっています。

NPO法人黒島観

光協会は、国の補助金を活用し建設され、平成二八年四月にオープンした「ウエルカムハウス」を拠点に、島を訪れる観光客の観光案内と地元農海産物などのお土産品の販売を行っています。

島内には公共交通



黒島：フェリーは、佐世保市相浦港から高島を経由して黒島港に着く。面積4.6km²、周囲12.5km、人口399人(令和元年5月現在)。鎖国時代、島の西側の番岳に異国船の見張所が置かれた。島名はポルトガル語のクルス(十字架)に由来する説と、鳥影が樹林で黒くみえたとする説がある。



平成28年にオープンしたウエルカムハウス。レンタサイクルの貸し出しも受け付ける。



多くの観光客が訪れる島のシンボル、黒島天主堂。

機関がないためレンタサイクルとして大人用一三台、子ども用三台の電動アシスト自転車を出し、島の自然とゆっくりとした時間を楽しんでいます。

ウエルカムハウスでは事務局長と販売職員の二名が常駐し、繁忙期には五名の臨時職員を確保しています。ご多分に漏れず黒島も少子高齢化で、島を担う若者が少なく職員確保が難しいのが現状です。現在の職員は、退職した人と観光協会会員から確保しています。平成二八年度から地域おこし協力隊が二名、黒島に着任していますが、うち一名は観光協会に配置されており、土日ははさんで週四日、島の情報発信や商品開発の業務を担当しています。

二〇年間地道に続けてきたガイド事業

島の中央にある一一七年の歴史を持つ荘厳な教会「黒島天主堂」。島のシンボルとなっており、観光客の皆さんが必ず訪れる場所になっています。

平成一〇年に国の重要文化財に指定されてから年々注目が集まり、島を訪れる観光客が少しずつ増加。観光客の皆さんから島の歴史文化や人々の営みについて説明してほしいとの要望があり、同一年九月に島の住民有志七名で「黒島史跡保存会」を発足させました。メンバーは漁師や商店主、婦人などで、ガイドとしての知識、話し方の研修を重ねガイドを行なうようになりました。

しかしその後、病気や高齢のため人数が減り、三名となってしまいました。数年間はこの三名で何とか対応してきましたが、その間も観光客は増加。新たなガイド育成が急務となりましたが、ガイドを募集してもなかなか応募者が現れませんでした。

協議と勉強会を重ねNPO法人を設立

平成一九年一月に「長崎の教会群とカトリック教関連遺産」が世界遺産暫定一覧表に記載され、世界遺産登録を目指す動きが高まり、同二三年一月、佐世保市社会教育課現在の文化財課が「文化的景観保存推進委員会」を設置。それを受け、島でも「文化的景観保存推進委員会黒島部会」



ガイド技能向上のため、定期的に勉強会を開催。

を同年八月に設け、島の主だった団体の代表者らで、今後いかにして黒島の景観を維持していくか協議を重ねました。島の過疎化が進行すれば景観の維持が難しくなるからです。

平成二三年九月二一日に、黒島と五島列島にある久賀島（五島市）の二島が国の「重要文化的景観」に選定されました。同二四年から二六年まで、島の保存計画が黒島部会で何回も協議され、その中で市当局より島の景観整備事業を委託するNPO法人の設立を要望されました。NPO法人とは耳にしたことのあるものの、詳しいことはわかりませんでしたので、黒島部会のアドバイザーだった佐世保観光コン

ベンション協会の富田柚香子さん（当時）に相談し、NPO法人設立に向けた勉強会を開催していただきました。法人設立勉強会には島の活性化に賛同した十数名が参加し、平成二六年一月から月一回多い時は月三回ほど開くことができました。

さらに、黒島より西方沖合の小値賀島おぢかにあり、外国人や修学旅行で集客して全国的に有名となっ

ていた「小値賀観光まちづくり公社」代表の高砂樹史さん（当時）を講師に迎えたいと観光コンベンション協会に相談したことで四回の来島、勉強会の開催が実現。講話では、島の住民とのコミュニケーション、公社の設立にいたる苦労話、事業活動計画策定や集客のノウハウなどを学びました。また、熊本「自然学校」プロデューサー代表理事の山口久臣さんにも講義していただいたほか、法人設立の手続きを学ぶため、県の県民協働課職員にも来島していただき研修会を開催しました。

そういった会合を重ねた末、平成二六年一〇月一〇日にNPO法人黒島観光協会設立総会を開催し、同二七年一月九日付けで法人設立登記完了となり、会員三八名でスタートを切りました。仏教とキリスト教の別け隔てなく組織しており、現在は会員も増加し、八五名にまでなりました。

島内外の協力を得ての情報発信

観光協会設立後、拠点となる場所がなかったため、拠点地の建設を市に要望しました。黒島部会の中でもすでに要望しており、市に予算を確保していただき、平成二七年に着工、翌二八年に完成とオープンを迎えました。

同時期に島の情報を発信するウェブサイトを立ち上げ、観光ガイドやレンタサイクルの予約受付をサイト内でできるようにしました。現在は地域おこし協力隊が担当しており、島の行事やイベントなどを適宜更新しています。

観光マップは、市観光課・文化財課で作成したものを活用しています。また、多国語に対応するため、長崎国際大学や長崎短期大学の協力を得て英語・韓国語・中国語版のマップを作成しています。

佐世保観光コンベンション協会では、パンフレットおよびウェブサイトにて、黒島の情報発信も行なっており、全国的にPRしています。世界文化遺産登録前に全国で上映された映画『坂道のアポロン』は、黒島を含む佐世保市内が撮影舞台となっていることから、全国的に島の認知度をあげる追い風となりました。

限られた滞在時間での体験プログラム

島では体験プログラムとして「ふくれ饅頭」づくりと「黒島とうふ」づくりを用意しています。二つとも島の冠婚葬祭には欠かせないもので、ふくれ饅頭は、饅頭の下にサツマサンキライ（島ではカカラと呼ぶ）の葉を使用し、中に餡が入っています。黒島とうふは、にがりの代わりに島沖合のきれいな海水を使用し固めてつくります。昔から縄で縛っても崩れないと言われ、できたての生とうふやお煮しめは美味なものです。ふくれ饅頭体験は約一時間半、豆腐づくり体験は約三時間ほどかかります。島内観光時間内（定期船の都合で島内滞在時間は通常約四時間半）では、ふくれ饅頭づくり体験が観光客に好評です。漁船で島を巡るクルージング体験もありますが、時間的に余裕がなく予約もあまり

いただいていません。

島内ガイドは個人や少人数の時は、基本的に徒歩でまわります。旅行会社の団体でバスの持ち込みがある時はガイドがバスに乗り込んで案内することもあります。前述のとおりガイド養成が急務でしたが、世界文化遺産登録前に観光協会会員も観光に対する認識が変化し、ガイド研修への参加が増え、現在一七名がガイドに登録しています。以前は天主堂のガイドが主だったことから、ガイドもカトリックの方ばかりでしたが、信仰にかかわらずガイドの勉強をして、現在は仏教徒の方もガイドをされています。世界遺



観光客に好評のふくれ饅頭づくり体験。

産の範囲は集落全体であるため、カトリック教徒もお寺のことを学びました。さらに、島内だけでなく市本土のガイド研修にも参加し、他地域のガイドと交流することで技能に磨きがかかり、個々独自のガイドとして取り組むようになりました。ガイド育成者の一人である私として

は今後の活躍を期待しています。

ウエルカムハウス内では、黒島の赤土で栽培されたタマネギ、ジャガイモ、サツマイモを特産品として販売しています。土壌が赤土のため、どれも甘く、本土の生果市場に出荷しても一般にあまり出回らない幻の特産品になっています。黒島でのみ手に入る農産物や漁協女性部がつくっている乾燥ヒジキや塩蔵ワカメなども常時販売しています。最近、島内ではイノシシの被害に遭わない作物として、荒地を開拓してトウガラシを栽培しています。それを使って商品開発した「二味胡椒」「ラー油」も販売しており、観光客に人気です。

さらなる観光資源の発掘で来島者増を

相浦からフェリーで黒島に向かう途中、高島に寄港します。昨年まで、高島にも地域おこし協力隊がいましたが、任期中で退任してしまつたため、現在は黒島の協力隊が高島のイベントにも出かけ協力しています。高島には弥生時代の人骨が出土し遺跡が残っています。黒島にはない歴史で注目されています。結果的に協力隊は同じ航路内にある両島の交流を担っています。近くにある島ですが、イベントで交流することがこれまでありませんでした。今後は、協力隊を通じて交流事業がきたらと考えています。

平成三十一年三月より黒島天主堂が耐震修復工事に入り、天主堂内の観光ができなくなりました。工事は令和二年三

月まで予定されています。「黒島の集落」で一大観光名所である天主堂が見られなくなるとあって、観光客が減少することが予想されます。世界文化遺産登録で高まつた機運に逆行しての工事となつてしまいました。

観光客減少に少しでも歯止めをかけるため、協力隊が中心となり、島を歩くイベント「つんのーで黒島ウォーク」を開催しました。いくつかのコースをつくり、のんびりゆつくり歩く。途中に軒先カフェや食事処を設け、地元の人との交流をするイベントです。今年のゴールデンウィークに初回を開催し、定員三〇名はすぐ満員となりキャンセル待ちが出るほどでした。今後はフットパス事業を展開し、観光客増加を図りたいと思います。

また、公共交通機関がない島内で、昨年から五月の連休や七、八月の休日に島の観光名所を巡る無料シャトルバスを運行し観光客に利用していただきました。今年も継続し運行する予定です。さらに、七、一〇月には、新事業として「宝さがし」を開催します。島内のどこに宝があるか、小学生を対象に佐世保市内全小学校に広報し、黒島の「宝さがし」に親子で参加してほしいと思っています。この間の休日も巡回バスを運行する予定です。

過疎化が進む中で、島の活性化は住民との協働が不可欠だと思えます。黒島に多くの観光客が訪れ、島に来てよかったと言っていただけできるよう会員一丸となつて「おもてなし」の心で取り組んでいきます。

DMOからのメッセージ

観光協会とともに進める観光地域づくり

長崎県佐世保市と小値賀町では、(公財)佐世保観光コンベンション協会をプラットフォームとして、2013年度に国土交通大臣より「海風の国」佐世保・小値賀観光圏の認定を受け、「住んでよし、訪れてよし」の観光地域づくりおよび日本の顔となるブランド観光地域を目指して5年間の事業を進めてきた。

当観光圏では、交通ハブであり宿泊施設が集積する滞在拠点でもある佐世保市街地を中心に、11の交流エリアを設定し、それらを巡ってもらうことで圏域での滞在期間を延長すべく受け入れ環境の充実を図ってきた。

当時、11の交流エリアのなかでも、黒島は島全体が「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産のひとつとして世界文化遺産認定を目指しており、すでに増加しつつあった来島者の受け入れや情報発信の体制整備が急がれる状況だったことから、重点的にサポートすることとなった。

黒島は江戸末期から潜伏キリシタンが暮らし、長崎県北域での信仰復活における先導的な役割を担った歴史を持ち、現在も住民の約8割がカトリック信者である。1998年に、信仰のシンボルである「黒島天主堂」が国の重要文化財に指定されたことを機に、住民有志が「黒島史跡保存会」を結成し、黒島における潜伏キリシタンの歴史を深掘り調査するとともに、ツアーガイドの取り組みも始めた。また、

観光客のニーズを受けて、島の伝統食の体験など住民との交流プログラムや、島の食材を生かした食事も提供していたが、これらすべてが予約制で、事前の申し込みがなければ、昼食を提供する食堂はなかった。さらに、島内には公共交通機関がないため、移動手段は徒歩しかない。これらの情報を一括して発信する体制も未整備で、今後増加する個人旅行者も視野に入れた受け入れ体制の整備が急務と思われた。

当協会では観光圏認定に際して、観光地域づくり推進室を設け、地域の状況に寄り添う形でサポート体制を強化。黒島では住民主体の観光地域づくり組織として「黒島観光協会」の設立と、黒島港における受け入れ拠点の整備を目指した。

その他、住民がつくり上げてきたそれぞれのコンテンツを磨き上げ、提供の仕組みづくりに協力している。また、レンタサイクルの導入など地域が自走できる体制づくりにも取り組んでいる。

当協会は、2017年に「日本版DMO」(地域の観光資源に精通し、地元住民や多様な関係者と連携しながら観光地域づくりの舵取り役となる法人)の「地域連携DMO」第1弾に登録された。佐世保市唯一の世界文化遺産がある島を舞台に、スピード感を持って活動を繰り広げる黒島観光協会とともに、観光地域づくりを推し進めていく。

(佐世保観光コンベンション協会
観光地域づくり推進室 中原優子)



山内一成 (やまうち かずなり)

昭和30年黒島生まれ。先祖は潜伏キリシタン。大学卒業後、市内の小中学校教員を経て、昭和63年から黒島公民館勤務。平成24年から館長(現職)。同27年に黒島観光協会を設立し、初代理事長に就任。